

令和四年度

岡山白陵中学校入学試験問題

国語

| | |
|------|--|
| 受験番号 | |
|------|--|

注意

- 一、時間は五〇分で一〇〇点満点です。
- 二、問題用紙と解答用紙の両方に受験番号を記入しなさい。
- 三、開始の合図があつたら、まず問題が一ページから二一ページまで、順になっているかどうかを確かめなさい。
- 四、解答は解答用紙の決められたところに書きなさい。
- 五、字数制限のあるものについては、句読点も一字に数えます。

次の各問いに答えなさい。

問 1 次の①～⑩にある――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① コライ、桜は日本人にとって特別な花である。
- ② オリンピックはスポーツを通じた平和のサイテンだ。
- ③ モンシロチョウは世界中に広くブンブプしている。
- ④ 夏にヒデリが続くと、稲の生育に悪影響を与える。
- ⑤ ヒジヨウなまでの厳しい罰則は設けるべきでない。
- ⑥ 体の大きな動物が小さな動物に対していつもユウイだとは限らない。
- ⑦ 昨年は岡山県にも緊急ジタイ宣言が出された。
- ⑧ その汚職事件によって彼の支払ったダイカは余りにも大きい。
- ⑨ 歩行者の安全のため、自動車に歩行者検知機能がヒョウジュン装備された。
- ⑩ あの研究者は独自の視点にシンコツチョウがある。

問2 次の(1)～(4)の文章の後にあるア～エは、——線部ア～エの改め方を示しています。そのうち、不適切な表現

を改善している選択肢をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(1) この度は当サイトを アご利用くださり、ありがとうございます。ご注文の品は、申し訳ありませんが現在入荷待ちです。お届けは二週間後を イ予定していますので、今しばらく ウお待ちしてください。なお配送の日程が決まりましたら、改めて エお知らせします。

ア ご利用くださり ↓ ご利用申し上げます
イ 予定しています ↓ 予定しております
ウ お待ちしてください ↓ お待ちください
エ お知らせします ↓ お知らせになります

(2) 発表から何年たっても少しも ア色あせない作品がある。もしドイツの児童文学で イあげるとしたら、おそらくその一つはミヒヤエル・エンデの ウ『はてしない物語』だろう。まるで自分も本の中に エ入りこんで、主人公と一緒に冒険できる。全ての子どもたちにぜひ読んでほしい作品である。

ア 色あせない ↓ 色あせる
イ あげるとしたら ↓ あげるとき
ウ 『はてしない物語』だろう ↓ 『はてしない物語』だ
エ 入りこんで ↓ 入りこんだように

(3) 周囲の状況を見て身勝手な行為をつつしむことは確かに必要だ。ア 例えば「人の振り見てわが振り直せ」もそれに関係することわざである。イ しかしそのことは自分で考えることをやめることにもつながりかねない。ウ ところで自分の意志を持つことをためらうことにもなるだろう。エ だから、人の振りを見てばかりではいけない。

ア 例えば ↓ ただし
イ しかし ↓ ところが
ウ ところで ↓ あるいは
エ だから ↓ それから

(4) 漢帝国の創始者劉邦は、おもしろい人物だ。一介の農民として生まれ、秦の国に対する反乱軍の将と 仕立て上げ、楚の国の大將軍項羽の怒りをかわしながら着々と力を たくわえて、最後はその項羽を 打ち破り、覇者となった。酒を愛する一見普通の男を皇帝に 押し上げたのは、彼を慕う周囲の人々だった。

ア 仕立て上げ ↓ 仕立て上げられ
イ たくわえて ↓ たくわえさせて
ウ 打ち破り ↓ 打ち破らせ
エ 押し上げ ↓ 押し上げられ

(このページに問題はありません)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学校一年生の「ぼく(雅也)」は、「おじさん」の知り合いの「志保子さん」が運営する「北の太陽」という「家」でひと夏を過ごすことになる。「北の太陽」には、さまざまな事情で親と生活できない五人の子どもたち(中学校一年生の「海鳴」、小学校五年生の「杏奈」、三年生の「ゆず」、一年生の「瑛介」、最年少の「麻央ちゃん」)が暮らしている。ある日の午後、志保子さんが食堂にみんなを集めて話を始める。

「さてみなさん。きょうの午前中、杏奈、ゆず、麻央ちゃんの三人は、ピアノを教してもらいに行きました。そこで先生に、秋の発表会に出てみませんか、さそっていたいただきました。それだけ、一生懸命に、練習をしているということです」

「わあー。よかったね」

声を上げたのは、瑛介だった。なのに女の子たちは瑛介の声に、むしろうつむいてしまった。
いやな予感がする。

志保子さんは「ところが」と、ひと呼吸おく。

「困ったことに、その発表会に、ドレスを着たいと、杏奈とゆずが言い出しました」

「だって、みんなドレスを着て演奏するって言うって」

「みんな？ 本当ですか、杏奈？」

「そうよ。みんな、ドレスを着るって。ね、ゆず」

「う、うん」

「先生も、なるべくドレスがいいって」

語気を強めて、杏奈が主張するということは、志保子さんから、反対されたってことか。

「それはへんですね。わたしが先生に電話をして聞いたら、制服やふだん着で参加する子もいると、おっしゃって

ました」

「ズルいよ。電話するとか！」

杏奈がどなる。

ゆずはチラッと、志保子さんを横目でにらむ。

「でも、制服で出るのは、男子だし。ふだん着の子は、ふだんから一生懸命に練習してない」

杏奈は折れる気はないみたいだ。

ぼくたち男子三人は、なんとなく、ぼかんと聞いていた。どうしてももめているのか、かんじんなところがわからない。

「志保子さん。ドレスだと、どうしてだめなんですか？」

① これくらいなら、口をはさんでもかまわないだろうと、ぼくは聞いた。

「いくらかかるのかは、わかりませんが、そういった予算はここにはないということですよ」

「よさんって、なに？」

瑛介がきょとんとした目を海鳴に向けた。

「お金だよ。瑛介がほしいおもちゃがあっても、お金がなきゃ買えないだろ」

「そういうことです」

志保子さんが、うなずきながら、女の子たちを見る。

「買うんじゃない、借りるの」

「どちらにしても、そういうわがままを言われると困ります」

「こんなのが、わがままですか？」

「ここではそうです」

「じゃあ、もう発表会に出るのあきらめる」

杏奈がふてくされる。

② ちよつとかわいそうに思えた。発表会にドレスを着るなんて、普通ふつうにやってる家庭はたくさんあるのに。やっぱり

ここは、普通の家とは呼べない。

「いいですか。発表会に出るなどは言ってません。ドレスも用意していただけないか、福祉協議会や、ボランティアセンターに問い合わせてみます」

「そんなのいや。ちゃんとしたのがいい」

「杏奈。ちゃんとしたのとは、どういう意味ですか」

「だから、お店に並んでる中から自分で選びたい。ピアノ教室に、パンフレットもあったよ。段ボールに入った服はもういや」

「ちゃんと新しい服も買っているでしょ」

「でも、みんなそんなふうには思っていない。ずっとどこかの倉庫の奥に、何年も眠ってたやつで、安い洗剤とほこりのおいししくないって、そう思ってる」

「なんですか。多くの善意を、踏みこむような言い方をして」

「わたしが言ってるんじゃない！」

志保子さんにたしなめられたとたん、^③杏奈が鋭利な刃物のような目つきになった。

「学校で言われているよ。くんくんくんくん、安い洗剤のおいがするって。いままで志保子さんや栄さんに悪いと思つて、だまっていたけど」

よほどがまんしていたんだろう。杏奈のひとみから、涙があふれた。

志保子さんもだまってしまった。

重い空気が立ちこめる。

「ねえ、杏奈、知ってる？」

海鳴は、ここは年長の自分が、どうにかしなきゃと思ったのだろう、やさしい声で話しかけた。

「^(注3)みつばちマーヤの冒険の中に、こんなものがある。——運命がひきはなしたものを、またいっしょにしてはならないよ、という、ばらこがねのクルトのセリフ。」

「どうということだと思おう？ ぼくはこう思う。ぼくたちは、ぜいたくとはけっしていっしょになれない運命なんだ。だからぜいたくを知ってしまうと、いつか身をほろぼすことになる。もちろん将来、自分の力でぜいたくできる境遇

になれたら、それはいいと思うけど」

「ドレスを着るって、ぜいたくなの？」

目を真っ赤にして杏奈はうったえる。

「いまのぼくたちにはね」

海鳴は、きぜんと答える。ぼくは胸が苦しくなった。

海鳴がぼくを見て言った。

「雅也はどう思う？」

「えっ、ぼくの意見？」

「だって、北の太陽の一員だもん」

海鳴は平然と言うけど、ぼくには答える準備もなければ、経験もなかった。

杏奈やゆずが、ドレスを着たい気持ちは理解できる。でもお金の問題となると、話はちがってくる。

海鳴は志保子さんにも気をつかっているのだろう。そう考えると、^④ここで自分の考えを主張するなんて、こっけいな気がする。

「もしかして、自分の気持ちがないの？」

「いや、そんなことはないけど」

「自分の意見に、自信がないとか？」

「それは……あるかも」

ぼくの意見は、よくクラスの和を乱した。

「話しても、だれかを不快にしてしまうかも。そう考えると、話すことに意味があるのかなって、そう思う」

「それでも、わかりあうためには、言葉にするしかないと思う。ここではみんなが自由に発言できる。みんな同じ太陽の下にいる。だから、もしなにか思っているなら、話して」

ぼくはとてもうれしかった。いまままで自分の言葉を、こんなにていねいにあつかってくれたのは、両親とおじさんだけだ。

「それなら言わせてもらおうけど、ドレスは着せてあげたい。それはあたりまえの感情だし、かなえてあげるのは、大人の責任だと思う。たとえドレスが似合わないとしても」

ふっと、海鳴が吹き出した。

「えっ、なにかおかしい？」

「あ、いや。⑤ それでいいよ」

応援おうえんしたつもりが、杏奈もゆずも、ぼくをいやそうな目で見る。

「ねえ、志保子さん。お金なら借りればいいじゃないですか」

ぼくなりに考えて言った。

「そういうくせを、いまからつけてほしくありません」

志保子さんはがんとして、意志を曲げる気はないみたいだ。

「瑛介はどう思う？」

海鳴が聞くと、

⑥ 「ぼくもドレス、きてみたい」

と、的外れなことを言って笑わせた。

(村上むらかみしいこ『みつばちと少年』による)

(注1) ピアノを教えるもらいに行きました——「杏奈」たち女の子は、ピアノを無料で教えるもらっている。

(注2) 栄さん——志保子さんの娘むすめで、「北の太陽」には、子どもたちの世話をする手伝いに来ている。

(注3) みつばちマーヤの冒険——ドイツの作家、ワルデマル・ボンゼルスボンゼルスの児童文学作品。物語のなかで、主人公の「マーヤ」はさまざまな虫たちと出会い、成長していく。

問 1

――線部①「これくらいなら、口をはさんでもかまわないだろう」とありますが、このときの「ぼく」の気持ちとして最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 志保子さんと杏奈が言い争いになったいきさつくらいなら、「北の太陽」で今後もずっと世話になるわけはない自分が聞いても、志保子さんははいねいに答えてくれるだろう。

イ 志保子さんが杏奈たちにドレスを着させない理由くらいなら、「北の太陽」のなかでも年長の自分が志保子さんの代わりに教えてあげても、だれも不自然には思わないだろう。

ウ 杏奈たちが発表会でドレスを着ていいかどうかくらいなら、「北の太陽」で世話になっている自分が杏奈たちの代わりに聞いてあげても、だれもお節介^{せっかい}だとは思わないだろう。

エ 志保子さんと杏奈がこのまま仲たがいするくらいなら、「北の太陽」で生活して間もない自分が和解させようとしても、海鳴や瑛介は余計なお世話だとは思わないだろう。

オ 杏奈たちが発表会でドレスを着られない理由くらいなら、「北の太陽」に來たばかりの自分が志保子さんにたずねても、だれも差し出がましいとは思わないだろう。

問 2

――線部②「ちよつとかわいそうに思えた」とありますが、「ぼく」には、どのようなことがそのように思えたのですか。わかりやすく説明しなさい。

問3

――線部③「杏奈が鋭利な刃物のような目つきになった」とありますが、「杏奈」がどのような様子に見えたことをたとえているのですか。その説明として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 志保子さんの真意を見抜いて、冷ややかに相手を見下している様子。
- イ 志保子さんに疑念をもって、ひそかに反論の機会をうかがっている様子。
- ウ 志保子さんに非難されて、理性を失いけんかごしになっている様子。
- エ 志保子さんの思いを理解して、すがすがしい気持ちになっている様子。
- オ 志保子さんに言い負かされて、自分の落ち度を必死に隠かくそうとする様子。

問4

——線部④「ここで自分の考えを主張するなんて、こっけいな気がする」とありますが、このときの「ぼく」の気持ちを説明した次の文章を読んで、後の(1)～(3)の問いに答えなさい。

杏奈やゆずの気持ちは理解できるが、志保子さんが言うように、Aがないとなると、ここで杏奈をBような考えを主張したところで、どうにもならないことはわかりきっている。そのうえ、海鳴は自分の考えを主張しながら、杏奈やゆずにだけでなく、Cのにも、それも台無しにしてしまうかもしれない。

(1) Aにあてはまることばを十五字以内で考えて答えなさい。

(2) Bにあてはまることばとして最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア かばう
- イ さとす
- ウ あざむく
- エ いざなう
- オ いさめる

(3) Cにあてはまることばを本文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

——線部⑤「それでいいよ」とありますが、「海鳴」はどのようなことに対して「それでいい」と言っているのですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア だれも不快な思いをしてほしくないから自分の考えは言わないほうが良かったですと考えていた「ぼく」が、海鳴にうながされるままに話をしているものの、皮肉をまじえた本音を打ち明けたこと。

イ だれかを不快にするくらいなら自分の考えなど話す価値がないと思っていた「ぼく」が、言わなくてもいい余計なことまで言うてはいるものの、自分の考えを自分のことばで表明したこと。

ウ 今まで人の和を乱すような発言ばかりしてきた「ぼく」が、言い方にまじるところはあるものの、ぎすぎすしたその場の雰^{ふん}囲^い気^きをなごませるために自分の意見を言う努力をしたこと。

エ 杏奈たちを心の中で応援しているようにみえた「ぼく」が、少々口がすべったところはあるものの、本心では志保子さんの考えに同調していることをほめかす意見を言ったこと。

オ 自分の意見をはっきりと言える自信のなかった「ぼく」が、お世辞にも上手な言い回しだとは言えないものの、ユーモアをまじえた独創的な考えをみんなの前で発表したこと。

問6

——線部⑥「『ぼくもドレス、きてみたい』と、的外れなことを言って笑わせた」とありますが、本文全体の内容をふまえて、ここから読み取れることとして最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 「北の太陽」の仲間たちは、どんなに対立してもすぐに笑って許し合う、やさしくて思いやりのある人たちばかりだということ。

イ 「北の太陽」の子どもたちは、自らが背負っている不幸な運命に負けまいと、意識して明るくふるまいながら生きているということ。

ウ 年齢や立場のちがいをこえて、たがいに思ったことを気がねなく発言できる人間関係を、「北の太陽」で暮らす人たちは培っているということ。

エ 対立や失敗をおそれず、自分の意見をみんなの前で言えたときにはじめて、「北の太陽」の一員として認めもらえるということ。

オ どのような苦難も、明るく笑ってさえいれば乗りこえられるという信念を、「北の太陽」で暮らすだれもが持っているということ。



次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(注¹) インゴルドは自著『ライインズ』のなかで、「線」には、あらかじめ決まった始点と終点とを定規で結ぶような直線と、どこに行くか定まっていないうフリーハンドの曲線との二種類がある、と言っています。

最初の直線は、目的を決めて、それに向かってまっすぐ進むような生き方に重なります。おそらく結果を重視する受験勉強やビジネスの世界などにあてはまるでしょう。試験に受からないと意味がない。ものが売れなければ仕方がない。受かるためには、売れるためにはどうしたらいいか。何があっても、その目標を効率的に達成したい。日々、そういう思いで生きている人は少なくないと思います。でもインゴルドに言わせれば、^①そこには落とし穴がある。

まず定められた目標以外のことを考えなくなる。ある種の思考停止に陥る危険性があります。何かを成し遂げるにはどうしたらいいか、という問いの立て方からは、なぜ私たちはそうしようとしているのか、というそもそもの問いが排除されています。でも、たとえ大学に合格できても、大学で何を学ぶのか、大学に行ったらうでどう生きていくのか、という大きな問いは残されたままです。

ビジネスの現場でも、そもそも何のために働いているのか、なぜそれを売りたいのか、その原点を問うことが重要な^(注²)ブレイクスルーをもたらすことがあります。でも、その大切な問いはスルトされてしまう。

もうひとつの落とし穴は、目標に到達することだけを考えた場合、その過程でどのように動くかとか、どんな手段を使って目標を達成するのかなどが問われなくなる点です。できれば最小限の努力やコストで、最短の時間で目標を達成したい。そうなると、その過程に起きるすべてが余計なことになります。

インゴルドの言葉を借りれば、それは出発前からすでに決まった経路をたどるだけの旅のようなものです。旅のおもしろさは、予定どおり目的地にたどりつくことより、その過程でどんなおもしろい出来事と出会えるかにかかっているのに、直線の旅は、そのプロセスを全部、余計なものにしてしまう。

それに対して、フリーハンドの曲線はどうでしょうか？ インゴルドは、それを徒歩旅行にたとえています。歩い

ている人は、進むにつれて変化し続ける眺望や、それと連動して動いていく道の行き先に注意を払う。その途中で起きることをちゃんと観察しながら進んでいる。だから偶然の出来事に出会っても、それを楽しむ余裕がある。

その道すがらに出会う予想外の出来事は、とりあえず時刻表どおりに電車に乗って、計画どおりの日程をこなすことばかり考えている人にとって、旅の邪魔だと感じられるでしょう。しかしインゴルドは、フリーハンドの線にこそ、人は生き生きとした生命の動きを感じられるはずだと言います。

とはいえ、私たちは日々、時間に追われ、与えられた仕事や予定をこなすことで精一杯です。ひとつの仕事を片付けたら、また別の仕事にとりかかる。そのあいだに周りをじっくり観察しながら進む余裕はありません。インゴルドの言葉は、そんな慌ただしい日常を過ごす私たちにも ② 大切なことを思い出させてくれます。

私は毎朝、娘を幼稚園のバス乗り場まで連れていくのですが、時間が決まっているので、いつも慌てて家を出ます。「はい、急いで！」と娘に声をかけて急がせることもしよつちゆうです。

そのバス停の近くの生け垣に二匹の大きな蜘蛛が巣を張っていて、蜘蛛が大好きな娘はいつも「蜘蛛さん見ると、お腹がふくれていたり、逆に少し細くなっていたり、蜘蛛の巣の張り方が変わっていたり、ちようど巣にかかった虫に噛みついていたりすることもあります。そんなとき、私まで「おお！ すごい！」と、思わず写メを撮ったりしています。

ほんとうにささいなことですが、インゴルドの言葉を読むと、もしかしたら限られた人生、娘を無事に幼稚園のバスに乗せることより、毎日、蜘蛛の様子を二人で観察して驚きや発見に満ちた瞬間を味わうことのほうが大切かもしれない、と思えてきます（バスに乗り遅れると、あとがたいへんなのですが……）。

たぶん私たちの日常には、そんなふだんは気づかないところに「生きる喜び」が潜んでいる。なのに、たいていは気づかずに通り過ぎてしまう。でもそのささいな喜びを人生からすべて取り去ったら、あとに何が残るのか。そう考えさせられます。

私たちは小さいときから好きなことを我慢してがんばりなさい、そうすればよりよい人生が送れる。そう言われ続

けて大きくなりました。でも目標を達成したらそこで人生が終わるわけではない。目標の達成は通過点でしかありません。またそこで歩み続けなければならない。

大きな目標を達成することだけを目指して、それまでのあいだずっと周囲の変化や他者の姿に目をつぶって耳をふさぐ。そうやって「わたし」の変化を拒みながら足早に通り過ぎていくうちに、私たちは確実に「死」へと近づいていきます。

インゴールドも、フリーハンドの曲線のような人生だけがよりよく生きることだと言っているわけではない。線には直線と曲線の二つがあるのに、私たちは知らないうちに直線的な歩みをしてしまいがち。だからこそ二つの歩み方があることを自覚できるかどうか。それが「よりよく生きる」ことにとって意味がある。たぶんそう考えているのではないかと思います。

周囲の変化に身体を開き、その外側に広がる差異に満ちた世界と交わりながら、みずからが変化することを楽しむ。いきあたりばったりの歩みのなかで「わたし」に起きる変化を **X** 的にとらえる。そういう姿勢は、まさにさ、まごまに異なる他者とともに生きる方法です。そして、それは変化がいつそう激しくなるこれからの時代にこそ必要とされるのだと思います。

すべてが自動化され、先進技術に頼らないと生きていけなくなる時代には、私たちの歩みは、最小限の努力で最大の効果をあげるようますます急かされるかもしれません。

そんな「効率」だけを求める志向性を私たちはすでに **Y** 化しています。ナビやスマホの経路検索で「ここに行くにはこれが最短ルートです」と示される。ネット書店では「いまのあなたにオススメの本はこれです」と提案される。その指示に従うのが最適解で、それ以外は不正解のように感じられる。

そのとき、ふらふらと町を歩きながらたまたますてきな店を発見したり、本屋さんの本棚を眺めているうちに人生を変える本と出会ったりする機会が失われる。人生は、往々にしてそんな偶然の出会いから「喜び」が得られるにもかかわらず。

もちろん人生には困難な出会いもあります。それはどんな生き方をしても避けられない。でも苦しみを乗り越

えるためのヒントも、その変化に開かれた姿勢のなかにあるような気がします。

インゴルドの二つの線は、他者との二つのつながり方とも重なります。他者との境界に沿って、その差異を強調する「共感のつながり」は、「わたし」の存在の確かな手ごたえを与えてくれる大切な承認しょうにんの機会です。がんばって目標を達成すると満足感が得られる。それを人からほめられると、うれしくなる。そんなポジティブな感情をもたらします。でも、そこには同時に異質なものや変化を拒む力も潜んでいる。異質なものは大切な「わたし」を脅おびやかす存在であり、「わたし」が変えられてしまっただけとはいけない、と。

これはあたかも最初に掲げた目標を達成することだけが重要であって、途中で目標が変わったり、目標とは関係ない出来事に出会ったりすることは邪魔なことではない、という直線的な生き方のようです。

一方、「わたし」が他者との交わりのなかで変わる「共鳴のつながり」は、予想外の出来事や偶然の出会いで変化が生まれることを、みずからの糧かてにします。自分の生まれ育った世界とは違う世界を生きる人や違う価値観の人との出合いをみずからの「喜び」に変える姿勢でもありません。

違いを拒まず、その違いとの交わりをみずからの可能性を広げるものとしてとらえる。するとひとつの固定したゴールを定めていないので、その違いを楽しみ余裕が生まれます。目標を達成できないと、ふつう「失敗」と見なされますが、人生の価値をはかるひとつの指標を定めぬ曲がりくねった線の上では、それは「失敗」ではなく、興味深い「変化」になります。困難や苦しみも人生の味わいになるかもしれません。

「わたし」や「わたしたち」が変化するからこそ、周囲の人や環境かんきょうも、自分自身もあらたな目でとらえなおすことができます。脅威きょういに感じられた差異が可能性としての差異に変わる。それこそが、さまざまな差異に囲まれ、差異への憎悪ぞうおがあふれるこの世界で、^④他者とともに生きていく方法なのではないか。それが、私が文化人類学を学ぶなかで手にした実感だったように思います。

(松村圭一郎『はみだしの人類学』による)

(注1) インゴルド——イギリスの文化人類学者。文化人類学とは、様々な文化・社会を比較研究する学問のこと。

(注2) ブレークスルー——難関を突破すること。

問 1

――線部①「そこには落とし穴がある」とありますが、それを説明した次の文章を読んで、後の(1)～(3)の問いに答えなさい。

□ A □には、目標に向かうにあたっての□ B □のみに意識が向き、自分の行動の□ C □は考えないという思考停止に陥る危険性がある。さらに□ A □には、目標到達への効率ばかりが重視され、その□ D □に意味を見出す^{みいだ}という視点を一切もてなくなる危険性もあるということ。

(1) □ A □にあてはまる表現を本文中から二十六字で抜き出して答えなさい。

(2) □ B □・□ C □にあてはまることばとして最も適当なものを次のア～オからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 利得 イ 意義 ウ 順位 エ 方法 オ 短所

(3) □ D □にあてはまることばを本文中から四字で抜き出して答えなさい。

問2 線部②「大切なこと」とは、どのようなことですか。わかりやすく説明しなさい。

問3 本文中の X・Y にあてはまることばとして最も適当なものを次のア～オからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | | | |
|---|----|----|----|---|------------------------|---|------------------------|---|----|---|----|
| X | …… | 「ア | 国際 | イ | 分析 <small>ぶんせき</small> | ウ | 肯定 <small>こうてい</small> | エ | 一元 | オ | 批判 |
| Y | …… | 「ア | 機械 | イ | 有料 | ウ | 形式 | エ | 問題 | オ | 内面 |

問4 線部③「共鳴のつながり」とありますが、その具体例として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア イスラム文化における宗教と生活の関係をインターネットで調べ、その文化独特の生活習慣を確認した。
イ アフリカからの留学生と交流をする中で、むしろ本国文化についての気づきがあり新鮮な驚きを覚えた。
ウ オリンピックで本国の選手の活躍かつやくしている姿を見ると、自分の事のように感じられ誇ほこらしい気分になった。
エ 中学校で他県出身の友人ができたが、同じ言葉でもアクセントが自分とは異なっており違和感いわかんを抱いた。
オ SNSの自分の投稿とうこうに支持が多く集まったとき、自分が認められたようで安心感を得ることができた。

問5

——線部④「他者とともに生きていく方法」とありますが、それはどのような生き方のことを言っているのですか。わかりやすく説明しなさい。

問6

本文の表現や内容について説明した次のア～オから**適当でないもの**を一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 筆者と同じ研究分野における考え方を引用することで、自分の主張の説得性を高めようとしている。
- イ 「落とし穴」や「旅」のような^ひ喩^ゆ表現を入れることで、説明を具体的にイメージしやすくしている。
- ウ 筆者の娘の話題といった身近な具体例により、専門家以外の読者でも理解できる書き方に努めている。
- エ 「スマホ」「ネット書店」などの話題をからめ、文化人類学の知見を日常へつなげようとしている。
- オ インゴルドの考え方と比べて違いを示すことで、筆者の主張の独自性を明確にしようとしている。